

「曲直瀬道三と茶」補遺

岩間真知子

茶の湯文化学会／美術史学会

安土桃山時代の医師・曲直瀬道三は、日本医学中興の祖と称される。道三は医療のみならず和歌や俳諧、茶や香にも造詣が深かった。当時の権力者・織田信長や豊臣秀吉は茶道具に大きな価値を付け、それを領地に代わる恩賞として与え、また茶会に招く、あるいは招かれることもステータスとして機能させたため、茶の湯は社交の必須アイテムとなった。そうした時代を生きた道三も茶道具の名品を集め、茶会に参加し、茶会を開いた。それについて「曲直瀬道三と茶」(『曲直瀬道三と近世日本医療社会』所収)に記したが、その後、閲覧した資料から明らかになったことを、ここに述べたい。

道三の子孫から昭和6年医師・藤波剛一氏に渡った道三関係の資料は、現在、慶応大学図書館と杏雨書屋に所蔵される。

まず杏雨書屋蔵の藤波剛一の書齋「乾々齋書屋」の張り紙のある『道三家記』(乾5402)から、道三の茶に関する箇所を紹介しよう。

- ①元亀9年12月に信長は秀吉に茶に招かれ、道三が相伴したと「秀吉家譜」にあると記す。ところが元亀は4年で終わる。そこで林羅山編『豊臣秀吉譜』上巻(三巻のうち)を見ると、天正9年12月に同文があり、信長は丹羽長秀、長谷川丹波守と道三を伴ったため、この事跡は天正9年12月と確認できる。
- ②京都の道三屋敷は秀吉の在世時に、台徳君つまり徳川二代将軍となる秀忠の屋敷で、屋敷の東方に井戸があった。その井戸の水は軽く、京中の井戸が涸れても渴くことがなかった。道三の継嗣・玄朔の別称・東井はこの井戸に由来すると記される。この屋敷は、『宜爾拙記』によると、天正6年に玄朔が竹内親王(三ノ宮)に投棄した後、正親町天皇から賞与されたとある。
- ③京都新町通りの道三邸の地子銭(地租あるいは地代)は、以前の官許の通りで相違ないと、天正6年11月22日付け京都所司代・村井貞勝の署名文書が記録される。
- ④京都屋敷にある手水鉢は元々秀忠のもので、屋敷が類焼した後も残っていたと記す。
- ⑤「家什旧記」として、次の品目を列挙する。

富士茄子 蓼冷汁天目(昔珠光所持) 印台(尼崎) 桃尻花生 目黒達磨(牧谿筆) 鶉壺(昔鹿苑院殿御物) 打曇大海 肩衝 箸广(紹鷗) ホウノサキ(安井より) 野洲井茶碗(信長, 上ル) 舟(昔安井) 右家伝之什器天下之名物也。

⑥天正4年2月25日朝、雲巢から花の一儀を熱望されたため、玄朔は薄板と桃尻の花入れを出して待つ。玄朔は板を置き、花瓶に水を八分入れ、桃花を籠盆に入れ置き、一枝を入れ、その後着座し飯、酒、御茶を過す。この花の一儀を所望したのは、天文12年8月10日付で建仁寺284世住持となった雲巢洞仙か(『鹿苑院公文帳』)。

⑦道三は三伯坐元と侍者宛ての書状(年号不詳, 3月12日付)に、次のように述べる。「蓼冷汁天目の茶碗と、鶉茶壺は老衰末期まで慰めとして所持したいが、富士茄子の茶入れや目黒達磨の絵などの茶道具は悉く分散した。元の顔輝筆「四睡図」は、室町将軍旧蔵の名品で、江州小田氏から蒲生氏郷の所持となっていたが、大病平癒の後、蒲生からお金に副えて賜った。自分が老年となった今、電庵様に差し上げたい。これは日本の名品なので、秘蔵してほしい。若い時、足利にいた時に懇切にいただき、上京後も無事に過ごせた、そのご高恩に少しでも報いたい」と。坐元は禅寺の住持の別称で、三伯坐元は慶長16年付で円覚寺156世住持となった三伯昌伊であろうか。『鹿苑院公文帳』には、足利学校とも注記されるため、足利学校で道三と共に学んだとも推察される。

次に慶応大学図書館の「曲直瀬家文書」には、文禄5年閏7月(1596)に玄朔が息子元鑑に書き与えた手簡がある。その第十条に「連歌、茶之湯、棋将碁以下之事、一切不可心懸 只朝暮之心頭、医道一遍ニ可仕事」とあり、玄朔は、茶の湯などの芸事よりも、医師として医道に専念するよう、息子に告げたことが知られる。